

4ヶ月ぶりの「京都研究会」

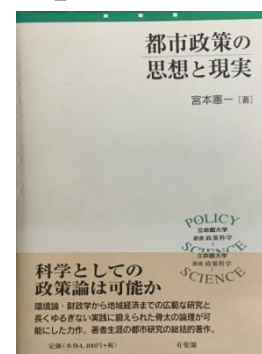
昨日 20 日午後、宮本憲一先生とゼミ卒業生らによる「京都研究会」が 4ヶ月ぶりに開催された。写真のように、私が矢作弘『都市危機のアメリカ』を読む、と題して報告した。久しぶりなので、パワーポイント報告にパワーをこめた。宮本先生らと研究会が再開でき、先生の前で報告できたことは本当に嬉しかった。

報告では本書の特徴と構成を紹介して、とりわけスーパースター都市の「かたち」、ジェントリフィケーション、創造都市論の提唱者リチャード・フロリダに焦点をあてた。脚光をあびた創造都市が未曾有の格差社会を生み、フロリダが自説を修正して「転向宣言」したこと、コロナ禍の都市政策などについて問題を提起した。本書第 1 部を中心に報告したので、ラストベルト都市や郊外都市にはあまり触れられなかった。



報告のあと、まず宮本先生から示唆に富むコメントがあった。本書はアメリカの都市、現代都市の課題をさぐるうえで貴重な成果だ。フロリダの「転向」について創造都市論者の見解を聞きたいものだ。ジェントリフィケーションは多国籍企業による新自由主義グローバル化の都市社会の象徴であり、それは福祉国家の危機から生まれた。ジェントリフィケーションはイギリス、サッチャー政権のインナーシティ政策が始まりであり、ニューヨークで典型的に発達した。1980～90年代にかけて世界都市とともに、グローバルな環境の危機と「持続可能な都市」の政策を生んだ。2008年の金融危機は、世界都市を危機に陥れた。これからの大都市はどこに向かうのか。金融・不動産中心から、情報・通信・科学技術の都として発展するのか。コロナ問題もあり、大都市の終焉となるのか。

写真は 1999 年に出版された宮本先生の名著『都市政策の思想と現実』有斐閣。表紙カバーに「著者生涯の都市研究の総括的著作」とある。先生は 20 年余り都市研究から離れていたが、また復活させたいと述べられた。帰宅してから、久しぶりに本書を手にとった。先生のコメントに関連したところを書き写しておきたい。



グローバル化は経済と環境問題の 2 つの分野ですすみつつある。このグローバル化は世界史上人類にとって最初の経験である。それは都市のあり方に大きな変動を与えつつある。この変革期には 2 つの都市のネット・ワークがあらわれつつある。ひとつは多国籍企業による経済の秩序に応じた「世界都市」ヒエラルヒーである。もうひとつは地球環境保全をめざす Sustainable City(環境維持可能な都市)のネット・ワークである。

(2021 年 3 月 21 日)